

中高年齢者によるライフイベントの評価

草野篤子（信州大学）

〔目的〕 中高年齢者にとっては、ストレスを伴う生活環境の変化や、ライフイベントが多く、このためうつ病になったり心身ともに老化が急激に進み、個人、家族、コミュニティの各レベルで種々の不適応が生じる。最終的には臨床的な調査が必要であるが、第一段階として、今回の独自調査のライフイベント諸項目と、SRRS (Social Readjustment Rating Scale) から抽出した主要項目を統合して、通文化的ライフイベント調査票を作成することを目的とする。

〔方法〕 まず中高年齢者を対象として、生活を再調整するのにエネルギー量が多く要るライフイベントについて聞き取り調査を行ない、独自のライフイベント調査票を作成した。この調査項目と、Holmes & Rahe等が作成した社会的再適応評価尺度（SRRS）に基づいた2種類のライフイベント調査項目に対して、1996年6月下旬～7月下旬にかけて、長野県老人大学学生353名を対象にして配票調査を行なった。

〔結果〕 再適応するのに必要なエネルギー量（LCU）を測定するため、まず「結婚」を50とし、各ライフイベント項目を0～100の間で相対的に評価した結果、Holmes等が米国で行なった調査に比較して、50以上に評価された項目が、43項目中24項目と過半数を超えている。LCUが最高となった項目は、両調査ともに「配偶者の死」であった。大きな差異が認められた項目は、Holmes等が「離婚」、「配偶者との別居」、「配偶者との和解」等、夫婦に関わる項目の順位が高いのに比して、日本での今回の調査は相対的に低かった。今回の独自調査とSRRSの両者において、LCU得点について著しい性差が見られた。